［史料］

# ドイツ中世商人の日記の邦訳（1）

## 「ルーカス・レームの日記」（1494–1541年）

山本　健*

# Translation of a Medieval German Merchant's Diary (1)

## —*Tagebuch des LUKAS REM aus den Jahren, 1494–1541*—

Takeshi YAMAMOTO

This paper translates a medieval German merchant's diary into Japanese in order to examine the mentality of a merchant in south Germany in medieval times. This diary was written by Lukas Rem in the sixteenth century and edited by B. Greiff in 1861. This edition was titled *Tagebuch des LUKAS REM aus den Jahren 1494–1541, Ein Beitrag zur Handelsgeschichte der Stadt Augusburg*.

Lukas Rem was born in 1481 in Augsburg. His grandfather had changed all his property into money and invested in Venetian trade, as the first person who imported cotton. He had made it in business and become one of the richest people in Augsburg.

Lukas was 13 years old that he was sent to Venice to study the skills of bookkeeping and so on. He was 17 years old that

＊やまもと・たけし：敬愛大学国際学部助教授　ドイツ中世史
Associate Professor of German Medieval History, Faculty of International Studies, Keiai University.

he was formally employed as a member of the Welser company. He visited many countries, including Lisbon in Portugal (1503－1510), the Madeira islands (1509), the Canaries (1509), and Antwerp in the Netherlands (1511–1516).

Lukas resigned the Welser company and founded his own trading company in 1518. In the same year he got married to Anna Ehem, 18, in Augsburg. He had seven children, of whom three died early in life. Lukas was so gifted with business ability as to increase the starting capital from 9,000 to 56,980 Gulden at the end of his life. He suffered from paralysis and rheumatism in his later years, so he frequently went to a hot spring resort to recover his health. After his last hot spring cure in 1540, he died at the age of 60 in September 1541. As a whole, he was a typical successful merchant as an employee and an employer at the golden age of the south Germany commerce in medieval times.

## 史料の紹介

ヨーロッパ諸国にとって16世紀が大きな転換期であったことは周知の事実である。それは「大航海時代」という言葉がいみじくも象徴しているように、ヨーロッパ世界の新たな膨脹現象を基礎にしている。本稿で紹介しようとする南ドイツ・アウクスブルク市[1]の商人たちもこの世界動向に敏感に対応した。

ところで、一般に「アウクスブルク市の商人ないし豪商は」と問われれば、まずは「アウクスブルク」の「フッガー家」と答えるのが常道であろう。筆者も直ぐさま諸田實氏の『フッガー家の遺産』(有斐閣、1989年)とその姉妹編『フッガー家の時代』(有斐閣、1998年)を挙げることができる。このフッガー家はその商業と金融業を武器に、やがてヨーロッパの覇権を争うスペインとフランスの王室をも巻き込み、16世紀の歴史の動向をも左右する国際的な商人・銀行家として活躍した。

しかしここに素朴な疑問が生じる。すなわち、「フッガー家」以外のアウクスブルクの商人たちはどのように対応していたのか、と。もちろん、

ヴェルザー家、モイテング家（Meuting）などの商人たちは、エーレンベルクによって[2]、「その他南ドイツの商人・金融業者」に括られてしまい、フッガー家ほどには注目されなかった。その理由は史料の残存状態にあった。フッガー家は文庫を設立して、比較的まとまった状態で文書を保存したのに対して[3]、ヴェルザー家は1614年の破産とともに商業文書を紛失するなど、文書の保存状態が悪かったからである[4]。

本稿で紹介するレーム家の場合は、19世紀中期にアウクスブルク市立図書館の司書であったベネデクト・グライフ（Benedikt Greiff）によって、「ルーカス・レームの日記(1494-1541年)」[5]の手稿が発見され、これが「アウクスブルク市の商業史への寄稿」として公表され、今日に至っている。この日記の執筆者たるルーカス・レームの母親はヴェルザー家出身者（マグダレーナ〔Magdelena〕）であるため[6]、日記の内容はおのずとヴェルザー家の経営実態にも及んでおり、そのために「発見時代」におけるヨーロッパの膨脹過程でヴェルザー家が果たした役割の分析を可能にするというメリットを含んでいる。

ところで、このルーカス・レームなる人物は1481年12月４日にアウクスブルク市で生まれている。彼の曾祖父、ハンス・レームは1357年に財産を売却して、商売の元手（500グルデン）を作り、その資金をヴェネツィアでバルヘント織りの原料の綿花に投資して莫大な利益を上げ、レーム家の基礎を築いた人物であった[7]。

ルーカス・レームは彼が13歳（1494年）の時に、商人として必要な知識を学ぶために、ヴェネツィアに送り込まれる。そこで修行をした後、ヴェルザー商会のミラノ支店で、帳簿の計算ミスを指摘して、周囲から注目される。1499年に彼は正式にヴェルザー商会の社員となり、リヨン支店に配属される。これが彼の「商人」としての第一歩であった。

その後は、ポルトガルのリスボン支店、砂糖の買い付けのためにマデイラ諸島やカナリア諸島へも足を延ばし、全身全霊を傾けて仕事に没頭した。リスボンでは、ポルトガル国王への彼の助言がポルトガルの交易拡大に役立ち、同国王との間に大きな信頼関係を築いた。商業の中心がネーデルラ

ントのアントウェルペンに移動するにつれ、彼もアントウェルペンに移り、ヴェルザー商会の取引先の新規開拓に努める。しかしこの地で上司たちが不正行為をしているのを発見して、訴えるも、逆に罷免され、これに嫌気がさして、1518年（36歳）にヴェルザー商会を退職した。またこれを期にアウクスブルク市に家庭を築き（アンナ・エームと結婚）、ルーカス・レーム商社を立ち上げる。彼は非常に商才に富み、9,000グルデンの原資を彼が死亡した年には5万6,980グルデン（6.3倍）に増やした。なお、家庭生活面では、妻との間に7人の子供を儲け、その内3人を夭折させている。また独身時代に儲けた5人の私生児がいたが、2人の記録しか残されていない。

彼の晩年は病気との戦いであった。そのため、彼は湯治療養[8]に心掛けるものの、1541年の9月に死亡した。享年60歳。

このような内容を持つ「ルーカス・レームの日記」のメリットは、当時の結婚式や引き出物、子供の出生や性格、旅行の楽しみ、湯治療養などの文化史や民俗生活史[9]、すなわち社会史に関して多くの情報を提供している点である。この日記を邦訳し終えたならば、筆者の社会史を考えてみたい。邦訳はそのための基礎作業である。

（注）

(1) アウクスブルク市史については、さしあたり、G. Gotlieb/W. Baer/J. Becker(Hg.), *Geschichte der Stadt AUGSBURG 2000 Jahre von der Römerzeit bis zur Gegenwart,* Stuttgart 1984,そして K. Bosl, *Die wirtschaftliche und gesellschaftliche Entwicklung des Augsburger Bürgerthums vom 10.bis zum 14. Jahrhundert,* München 1969; Dr. Christian Meyer, *Geschichte der Stadt Augsburg,* Tübingen 1907 などを、また諸田實『フッガー家の遺産』（有斐閣、1989年）の 2–26ページをも参照せよ。

(2) Richard Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger. Geldkapital und Creditverkehr im 16. Jahrhundert.* 2 Bde. Jena 1896. S.187–246.

(3) 諸田實『フッガー家の遺産』（有斐閣、1989年）、251–277ページを参照のこと。

(4) M. Häberlein/J. Burkhardt(Hg.), *Die Welser.* Neue Forschungen zur Geschichte und Kultur des oberdeutschen Handelshauses. Berlin 2002. S.12–14. しかし、1960年代の初期にディリンゲン修道院でヴェルザー家の商業証券の大きな束が発見されたり、さらに1993年にはアウクスブルク市立美術館で同家の商業帳簿の一部が発見されている（S.13）。

(5) なお、ルーカス・レームについては、Ehrenberg, *op. cit.,* S. 226–227を、またHubert Freiherr von Welser, Lukas Rem. in: *Lebensbilder aus dem Bayerischen Schwaben, Bd. 6,* München 1985, S.166–185を参照のこと。後者はベネデクト・グライフの「日記」の要約である。

同「日記」には、簿記（第３章）の箇所がある。簿記については、井上清『ドイツ簿記会計史』（有斐閣、1980年）、片岡泰彦『ドイツ簿記史論』（森山書店、1996年）を参照せよ。

(6)　M. Häberlein/J. Burkhardt(Hg.), *Die Welser.* S.105-106. なお、マグダレーナ（21歳）はルーカス・レーム２世（40歳）とは再婚である。彼女は17歳（1474年１月15日）の時に、ヨーハン・ミューラー（Johann Müller）と死別している。彼は1465年にネルトリンゲンから移住してきた商人ハインリッヒ・ミューラー（Heinrich Müller）の息子である（S.105の原注310）。

(7)　この点については、諸田、前掲書（19ページ）によると、ハンス・レームは1396年のアウクスブルク市の高額納税者の第３位であった。

(8)　M. Matheus(Hg.), *Badeorte und Baderreisen in Antike, Mittelalter und Neuzeit,* Mainz 2001を参照せよ。

(9)　この分野については、H・F・ローゼンフェルト他（鎌野多美子訳）『中世後期のドイツ文化――1250年から1500年まで』（三修社、1999年）を、また R・v・デュルメン（佐藤正樹訳）『近世の文化と日常生活、１～３』（鳥影社、1993-98年）を、さらに丹野郁『服飾の世界史　本編・資料編』（白水社、1985年）などを参照せよ。

# 〈邦訳〉ルーカス・レームの日記（1494-1541年）

## アウクスブルク市の商業史への寄稿（1861年）、B・グライフ編

日記の目次（１～ 110ページ）


編者の序言 ――― S.Ⅶ～XX

第１章　私の両親の出生と結婚式そして〔それ以外の〕若干の情報

〔ルーカス・レーム３世の家系図の紹介〕 ――― 1～4ページ

〈以上、本号〉

〈以下、次々号掲載予定、章タイトルは暫定訳〉

第２章　私の誕生と半生、頻繁な商旅と大商旅 ――― 5～29ページ

第３章　私の主な財産と収益そして商会の決算 ――― 30～42

第４章　私の婚約、結婚、私が妻に与えた結納品 ――― 43～51

第５章　私の結婚引き出物 ――― 52～55

第６章　私の隠居分（相続・取得した動産を含む） ――― 56～63

第７章　私の私生児の誕生と彼らの性格 ――― 64～65

第８章　私の正妻の子供たちの誕生 ――― 66～70

第９章　私の商会の雇用人 ――― 71～72

第10章　私の納税 ――― 73～76

（注記）①訳文の〔　〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したもの、
（　）内は原語である。
②(注)は重要な内容のもののみを原注から選び、通し番号を付けた。

## 編者（B・グライフ）の序言（S.Ⅶ～XX）

［S.Ⅶ］

かつて長年にわたり非常に活発に、そして大々的な方法で世界商業に参加していたアウクスブルク市、そして政治力および金融（資金）力（Geltmacht）を介して時々、歴史の流れに深く関与した――少なくとも同市の資金力を必要としていた諸侯の政治に重要な影響を及ぼしていたことが理解されている――アウクスブルク市は、同市の図書館ないし文書館が同市の商業（貿易）史全般の研究に、またとくに15～16世紀の特殊研究のために、最も完全な史料と膨大な素材を歴史家に提供するところであるかのように考えられがちであるが、実はそうではない。当地での徹底的な、しかも長期にわたる調査研究の結果から、私はこのような〔上記の研究に関する有益な〕史料は、アウクスブルクよりもむしろヴェネツィアやリスボンそしてアントウェルペン〔などの諸外国〕で捜し出され、かつ収集されねばならないと確信するに至った。

このような有益な史料が〔アウクスブルク市に〕少ないがために、――このことは部分的には、古き時代における商業の秘密保持に起因しているのかもしれないのだが――おそらく、このことが原因で、これまで誰一人として今日の歴史叙述の必要条件を満たし、かつ信頼できる史料に基づくアウクスブルク市の商業史の叙述を試みようとはしなかった。

このような状況の下では、将来の総合的な歴史叙述のためにも、まずは基本史料とその他の素材を収集し、かつ提供することが確かに有益であるように思われる。

［S.Ⅷ］

この点に関して、幸運なことに、私の努力は期待された結果が伴い、報われた。〔それというのも〕このような仕事は、当地の州立・市立図書館

の司書としての私の仕事柄、容易であった〔からである〕。すなわち、州立図書館で、私は時々幸運な史料を、少なくともアウクスブルク市の歴史と商業に関する特定の短期間を明らかにすることが可能で、注目に値する手稿を見つけたからである。

しばしば友人たちからその手稿を学問に役立ててはとの勧めや説得などを受けて、私もこれまで収集した史料を公開することが――その史料の内容によっては、その史料公開を〔専門家以外の〕広範囲な人々からも快く受け入れられることが想定されるのだから――望ましい、と思うに至った。

シュワーベン＝ノイブルク歴史協会（*Der historischen Verein von Schwaben und Neuburg*）の委員会が、私が常日頃考えていたこのような〔上記の〕願いを汲み上げ、そしてこれらの史料を少しずつ、同歴史協会の年報に「アウクスブルク市の商業史への寄稿」として公表したいという私の申し出を快く引き受けていただいたことは、私にはこのうえない喜びであった。

このようなご好意を得たからこそ、私はこの史料をより多くの読者層に提供できたのである。私は直ちにそのための手始めとして、以下の様な、すなわち『ルーカス・レーム（*Lucas Rem*）の日記』と若干の『同時代の商業書簡ないしアメリカおよび東インドへの新航路発見についての書簡と報告書（1497～1506年までを含む）』の編集を決心した。

しかし、中世ドイツ語およびアウクスブルクの特殊な歴史に精通していない読者に少しでも同『日記』等を容易に理解してもらうために、私は中世ドイツ語とアウクスブルクの歴史について若干の解説や注釈――その大部分は、同時代の手書き文書や年代記などからの引用である――を、同史料〔の最後〕につけるのが適当と考えた。しかし、『日記』の特殊、商人的な箇所に関しては、かりに私に判断を下せる能力があるかも知れない箇所であったとしても、私は〔商業に関しては〕まったくの素人であることを認めざるをえないので、このような箇所の正しい判断は、教養のある商人（商業家）の方々に委ねたい。彼ら商人は〔この商業に係わる箇所を一［S.IX］

読すれば〕必ずや、私には思いも及ばないような彼ら商人を魅了するものを多く見つけ出すことであろう。

さて〔ここでは〕、私がこれら二つの史料から読み取ったことを、そしてその中でも、とくに私にとって歴史的に意義があると思われる事柄について言及してみたい。それらの事柄を説明する場合、私はできるだけ簡潔に語ろうと思う。

〔まず〕『日記』から始めると、同『日記』は同時代の他の史料よりも詳細でかつ明確であり、そしてさしあたり〔『日記』が執筆される〕少し以前のアウクスブルク市の権力〔関係〕について、同市の商業の規模そしてその意義について、優れた証拠を提供しているように、私には思われる。

『日記』の執筆者が属していた時代を考察してみると、彼が生きた時代（生涯：1481〜1541年）は、まさに世界がより大規模に激変した移行期に当たり、しかも〔ヨーロッパ〕商業にとってもこの時期には〔その〕すぐ前〔1492年〕に生じた〔アメリカ大陸の〕大発見と〔インド航路を含む〕新しい商業航路等の発見によって、これまで知られていなかった新しい交易ルートが発見されるなど、極めて重要な、そしておそらく注目に値する事態が生じた時代であった。この、まさに、商業分野に変革をもたらし、またこれまで存在していたあらゆる諸関係を力ずくで激変させた時代の趨勢の中で、この『日記』の執筆者たるルーカス・レーム 3 世（Lucas Rem）は、フッガー家（die Fugger）と並んで、その当時、最も有力なアウクスブルクの商人ヴェルザー家（die Welser）の〔支店の〕社員や支店長（Diener u. Factor）として、すぐに〔しかも〕新規に〔新しい国際商業に〕参加することができた。そして彼の参加は、単なる一時的なものではなく、ほぼ20年の長きにわたって続いた。この新しい国際商業への参加の際に、世界の商業動向を絶えず本場（Quellen）で学び、かつ観察するという、〔これまでは〕それほど高くは評価されてこなかった優位な条件も彼に味方した。幸運また類まれな運命（星の下）そして新しい事態（動向）に順応する豊かな才能に支えられて、彼はやがて豊かな知識と体験という「宝物」を獲得した。そして彼はこれらの知識や体験を自分のために、また彼の商会の利

益のために、さらには彼の生まれ故郷のアウクスブルク市の栄誉のために、最も有効に利用する術（すべ）を心得ていた人物でもあった。

何故なら、その当時のアウクスブルクでは国家と商業の次元で、大激変が生じたこの時代を〔どのようにして〕利用するか（乗り切るのか）は、

［S. X］

一般に理解されていたため、アウクスブルク市は南ドイツでの商業・交易の中心地に躍進し、そしてその絶頂期を迎えることができたのである。この時代は〔まさに〕アウクスブルクでは教養（Bildung）そして世界商業の体験・知識・才能そして企業精神の分野において、ドイツ〔神聖ローマ帝国〕内外のいかなる都市もアウクスブルクの大商人たち（die großen Handelsherren）を凌駕することはできない、と自慢し、かつ誇りにできた〔最高の〕時代であった。というのは、アウクスブルクは、その大規模な商業活動と手工業の繁栄によって、全世界から大いなる称賛を獲得していたからであった。

アウクスブルクの豪商たちのこのような名声は周知の事実であったので、皇帝も各国の国王もそして帝国議会に参加していた諸侯（Fürsten）も、商業に関する高度で根本的な問題については、まずはアウクスブルクの豪商階級（die Handelsherren）の判断を求めなければ、いかなる議決も下されることはなかった〔程であった〕。――もちろん、豪商階級の判断とは、絶えずアウクスブルク市の発展の原動力であった商業を、いかなる方法においてであれ、停滞させないことが前提であった。――腹蔵なくかつ徹底した対話を経て、彼らアウクスブルクの商人たちはいつでも完全で自由な商業活動に賛意を表し、そして自由な商業活動に制限を設けようとするいかなる試みをも、帝国および商業の繁栄に対する危険〔要因〕と判断していた。彼らはすでにこの当時に、統一した確固たる度量衡を、また統一した貨幣をドイツ帝国内に導入することを、〔また〕商業活動の障害となっている関税障壁が消滅し、完備された道路網と全国的な安全度などが迅速な商品流通（Verkehr）を促進するはずだ、とも主張していた。

またこの時代は若い芸術家や学者が――いつの世にも彼らは商業の繁栄

を飾る最も高貴な伴侶（das Gefolge）なのだが――アウクスブルクに自らの居場所を見いだして住みついた、そういう時代でもあった。また、それは手工業が実際にその黄金郷を実現した時代でもあった。

〔ようやく〕ここで、これまで私が上記の報告の典拠になっていた史料『ルーカス・レームの日記』について言及しても良いであろう。しかし、私は後に、この史料を完全な形で伝えようと思っているので、詳細な言及は差し控え、ただ次の点だけを述べておくことにする。それは、史料を公表することで、上記の〔私の〕主張が真実である、ということ〔の他に〕、さらにそれ以上の多くの事柄が確認される、という事実である。私はそれ故に、上記の主張〔内容〕を手っとり早く確認すべく、ここであえてリー［S.XI］
ル（Riehl）の『アウクスブルク研究』のしかるべき箇所を挙げることにする。彼は〔その中で〕極めて正当にも次のように語っていた。すなわち、「アウクスブルク都市史のポイント（重点）は中世から近代への移行期にある。世界を揺り動かした15世紀末期～16世紀初期にかけての諸事実は、アウクスブルクに特別な偉大さをもたらした。アウクスブルクはルネサンス運動の感動的な諸理念（Ideen）、偉大な発明と発見、人文主義（ヒューマニズム）を、〔したがって〕また古代ローマ憧憬ないし古典学習によるゲルマン人伝来の一面性の克服と回春、および宗教改革などを、あたかも一つの焦点に集めるごとくに、すべて包摂しかつ個性的に具現したので、同市は独特の、まさしく世界史的な都市としての特徴（Signatur）を兼ね備えていた」と〔ドイツ四季年報誌（Deutsche Vierteljahrschrift）No.81〕。

商業が行われている至る所で、〔たとえ、それが〕非ヨーロッパ世界においてさえも、倉庫（Lager）や在外商館〔支店(Factorei)〕を築き、そしてその支配人や代理商たちを通して〔当地での〕商業および政治情勢に関するいち早い〔第一報としての〕、かつ信頼できる情報を入手することに、かなり以前から精通していた当時のアウクスブルクの豪商たちは――〈例えば、フッガー家、ヴェルザー家、ヘックステッター家（die Höchstetter）、

ヒルシュフォーゲル家（die Hirschvogel）そしてイムホーフ家（die Imhoff）などの豪商たちは〉――素早く、しかも如才なく、さらには精通した眼力を働かせて、①今や商業にいかなる時代が始まったのかを、また②これまでの諸関係が完全に変化・再編する中、彼らアウクスブルクの商人たちの使命が今後、いかなるところに有るのかを理解していた。このことはおそらく初めての体験ではなく――この件に関しては、〔彼ら以外の〕他の商人が彼らに先行しており、そしてその〔進むべき〕方向を示していたので――、むしろ〔この〕最初にして最高の時代〔15世紀末～16世紀初め〕にとっては、自明のことであった。彼ら豪商は自らの時代を理解していたのであった。それ故に、彼らアウクスブルクの豪商たちがドイツ人の中では、新しい〔インド〕航路の発見〔1498年〕直後に、独自に計画し、さらに独自の船舶を用いて東インド交易に参加し、そして彼らの在外商館〔支店〕や船舶を用いて東インドで入手した〔アジアの〕産物をヨーロッパの全ての国々に運搬した最初の商人であった、という事実は、商才にたけた彼らにとって、極めて大きな名誉とするところであった。このように東インド交易を開始して好ましい状況に導き、そしてそのことによってアウクスブルクの名声と栄誉を高めた、という大きな功績の大部分は、何を隠そう、［S.XII］

この『日記』の執筆者たるルーカス・レーム３世に拠るところが大なのである。しかし、①アウクスブルクの商人たちが、その当時のすべての大きな出来事について、いかに正確に、かつ余す所なく完璧に知らされていたか、また②彼らがその出来事をめぐって、いかに本気に、かつ深刻に心配していたかは、『日記』と『日記』の最後に補遺として付いている同時代の書簡と旅行記（報告書）の写し（Copie）が〔その生々しい〕証拠を提供している。

この写しはヴェルザー家の商取り引きに由来する。そしてこれらの写しはヴェルザー家から同家に近い親族であり、かつ同家に好意的な学者であったコンラート・ポイティンガー（Conrad Peutinger）の所有物になった。この人物は、この点で、故郷のアウクスブルク市の名声ないし栄誉のために

活躍した〔ことになる〕。この点については、いつか他の時に、すなわち、今以上に多数の史料が収集され、その多数の史料を公開することが可能になる時に、多くを語る予定でいる。

〔ともあれ〕これらの書簡が本来〔現存する書簡よりも〕多く存在していたのかどうかは、私には確認する術がない。しかし商人たちが幾星霜を重ねるあいだに経験した数々の遍歴に際して、残された資料が保存されるということは、資料がこれまでただバラバラの紙片（lose, fliegende Blätter）にすぎなかっただけに、奇跡に近かった。これらの注目に値する書簡や報告書と、特に本文のⅨ、Ⅹ、Ⅺの各ページは、この『日記』に対するある程度の注解でもある。

これらの書簡および報告書の写しを公表する場合、絶えず痛切な懸念（der peinliche Gedanken）――すなわち、ただヴェルザー家だけに、そのような報告書を所有する権利があるのだろうか。ヴェルザー家と並んで、その他の豪商たちもその種の報告書を入手していたにちがいない、ということはありえないのだろうか。〔ありえるとすれば〕同報告書はいつ、そしてどの豪商に届いたのであろうか、などの諸問題――が、私〔の頭〕を捉えて離れなかったことを、告白する。ざっと思いつくまま〔上に〕書き留めたこれらの問題点が、当地の私的な、ヴェルザー家が所有する文庫（Privat-u. Familien Archiven）で、この種の、またそれ以外の商業史料の調査を断念する原因になったのかもしれない。辛抱強い調査は――私は幾度も、そしてこの史料を収集した際にも経験したことなのだが――しばしば思いもかけない発見によって、十分に報われる。

［S.XIII］

したがって、私はためらうことなく、上記の事を根拠に、この『ルーカス・レームの日記』とその「付録」がアウクスブルク市の歴史の中で輝かしい一ページを築いていた、と主張したい。

しかし、私は『日記』の中に、さらにもっと大きな長所が、すなわち、私たちが『日記』の内容を注意深くたどっていくと、16世紀初期の商人の生涯と職業上の知識を身につける教育過程に関して、一つの完全で、明快

なイメージを描くことが可能になる、という長所があると思われる。

何故なら、『日記』の執筆者たるルーカス・レーム3世が私たちに示している内容は、彼の生涯の単なる個々の、とくに、彼が成功した一時期だけではなく、むしろ彼の全生涯、〔すなわち〕彼の子供時代、徒弟時代、遍歴商人時代そして彼の人生の後半における、家庭生活および〔独立した〕商人生活などの叙述だからである。そして〔その叙述も〕何と地味な、何と素朴な、〔それでいて〕何と真実で誠実な〔内容であろうか〕！　また彼ルーカス・レーム3世が商人として過ごした生涯は、おそらくその当時、今以上に立派な商人になろうと努力していたすべての人びとが究極において歩んだ〔人生過程そのもの〕であった。

ヴェネツィアはその当時もそれ以降も、長年にわたり、南ドイツの商人たちの〔子弟にとって〕エリート学校であった。人々は、もし故郷で幾分なりとも〔商人として〕名を上げようとするならば、ヴェネツィアに行って、そこで修業を積まねばならなかったにちがいない。私は実際に、あの時代から、ヴェネツィアで修業を積まなかった商人で、当地のアウクスブルクでそれなりの名を上げた商人を知らない。比較的後の時代の、極めて著名な大商人ヤーコプ・フッガー（Jacob Fugger）2世〔1459–1525年〕は――アイヒシュテット（Eichstädt）司教区のヘルリーデン（Herrieden）司教座聖堂参事会員（Domherr）であったのだが――子供のいない彼の長兄ウルリッヒ（Ulrich）の要請を聞き入れて(1478年)、〔19歳という〕年齢的にはかなり遅かったが、聖職禄（Pfründe）を辞して、そしてフッガー家の家業（Kaufhandel）を継ごうと決意した時、彼が直ちにフッガー商会のヴェネツィア支店で修業生活を過ごすために、ヴェネツィアに赴いたことを私たちは知っている。〔彼にとっての〕学校たるこのヴェネツィア支店と、商業をより良く理解するためにその後に行われた数回にわたる大きな商用旅行のおかげで、彼は商人として質の高い教養〔＝物を見る目〕を身に付けたのであった。そして、商人として質の高い教養こそが彼にその当時、すでにフッガー家が行っていた大規模な商業を、その後世界的に有名にした〔商業の世界化とさえ呼べる〕例の商業拡大へと導くことを可能にさせ

たものであった。『日記』の執筆者たるルーカス・レーム 3 世の父親も、まだ14歳にさえ達していない息子〔ルーカス・レーム本人〕を1494年に修業のために、ヴェネツィアに送り込んでいた。

［S.XIV］

この〔年端もいかない〕若者に何ができるのか。また〔ヴェネツィアの養成所での〕彼の勉学ぶりはどうであったのだろうか。当時の養成所の状態および同時代人の告白〔内容〕から判断すると、このルーカス少年は能力的には本当に劣等生であったのかもしれない。しかし、彼にはただ一つの、完璧にこなす得意技があった。それは乗馬（reiten）である。体の丈夫なこのルーカス少年はアウクスブルクからヴェネツィアまで僅か 8 日間という短い日数で、馬で駆けつけて来たのである。今日では僅か 1 日で、彼に劣らず馬でヴェネツィアに駆けつけることも可能であろうが〔当時としては驚異の速さであった〕。彼は〔年少ということもあり〕実際に能力的に恵まれてはいない。両親もそのように考えていた〔ふしがみられる〕。〔何故なら〕他人は〔もし有能ならば〕ヴェネツィアのエリート学校に進学させたであろうから。〔しかし〕彼はともかくヴェネツィアで自分の身を任せられる世情に長けた知人や友人と出会う。彼らは彼の世話を引き受けたが、〔それは〕彼らがかつて他人から世話を受けた場合と同様に、〔将来〕この若者からも何がしかのお礼が期待できると踏んで、世話を買って出たのであった。彼は自信を持って、彼の道中のお世話を任されたヴェネツィア定期郵便馬車夫（Ordinari-Venediger Postbote）と一緒に〔ヴェネツィアの〕リアルト橋のたもとにあるドイツ会館（Deutsche Haus am Rialto）に馬で乗りつけ、そして彼はドイツ会館の部屋で一緒に住んでいる親戚の人すべてと出会った。

彼らは、この若い従兄弟にして同郷人たるルーカス・レーム 3 世を優しく受け入れ、そして直ちに、彼が 1 人のイタリア人の許でイタリア語、算術そして簿記を学べるように手助けをした。そして彼はすぐに会計帳簿の勉学に没頭した。彼自ら語っているように、彼はそれらすべてを僅か 4 年間で完全に習得し、そして直ちに外国へ出向することを希望していた〔程

であった〕。

その〔彼の希望を実現させる〕ために、再び親類縁者が彼に手を差し伸べた。そして彼はフランスのリヨン（Lyon）へ派遣されたのである。彼はそこでフランス語を学び、そして金融－両替業務をも見学した。その帰路たまたま立ち寄ったミラノ（Mailand）で、彼はヴェネツィアで習得した商業知識を試す機会に恵まれた。まだ18歳にとどかないこの若者は当地で〔帳簿上の〕計算ミスを指摘し、〔誤った帳簿付けをした〕大人（Alten）に恥をかかせてしまった。〔しかし〕彼はその帳簿付けをした当の社員に〔正しい計算（数字）を教えるなどして〕きちんと手助けをもしていた。この〔帳簿の計算ミスを指摘する、という〕行為を期に、人びとは彼に注目した。そして〔結果として〕彼は幸運を掴んだのであった。〔というのも〕ヴェルザー家〔同家は母方の実家〕がそれ以来、この才能豊かな若者に注目し、そして1499年にこの若者を〔正式にヴェルザー商会に〕雇用したからであった。彼はこの事を誇らしく思い、そしてリヨンでの彼の新しい職場を名誉に思った。

［S.XV］

彼は精神的にもまた肉体的にも全力を尽くして仕事に専念した。彼は昼夜を問わず、あちこちへ商旅するなどして、安穏と暮らすことはなかった。つまり、今日はこちらかと思えば、明日はあちらへという有り様で、彼はどこに居ようとも、全身全霊を傾けて仕事に没頭した。彼は商取り引き〔先〕の獲得に尽力し、また人物評（Menschenkenntnis）を収集したり、さらには友人を作ることに心血を注いだ。また〔リヨン管内にある〕各支店の勘定〔決算〕書がヴェルザー商会全体の勘定書〔作成〕のために〔リヨン〕店に送付されて来た場合、しかもそれが重要である場合には〔なおさらの事〕、彼はまさしく昼夜を問わず、机の前に座り込んで熱心に帳簿付けをした。彼の主人がこのような有能で、役に立つ社員を昇進させ、そして彼を重要な役職に就かせて、当時、商会にとっても重要な〔当時の商業の中心地たるポルトガルの〕リスボンでの仕事を任せるべくポルトガルに

派遣したとしても、何ら不思議ではないであろう。〔そのリスボンでの仕事とは〕例えば、①インドへ出航する船舶を武装させ、②〔在〕インド商館〔支店（Indiahaus）〕で大規模な仕入れをし、③ポルトガル国王との交際を深め、④ヴェルザー商会の係争事件を解決し、そして⑤新たに確立した〔対東インド〕交易から、できるだけ莫大な利益を引き出すことであった。それとともに、しばしば若いルーカス・レーム3世には信頼が寄せられていた。〔それは、まさに〕ヴェルザー商会の繁栄と栄光そして没落をも、いわばルーカス・レーム3世の手中にあった〔と言っても過言ではなかろう〕。――彼はこのリスボンでも彼に寄せられていた大きな信頼に完璧に応えていた。彼はたゆまぬ努力の結果、短期間ですべての困難を解決し、そして彼のその能力こそが、やがて、信頼できる利益〔確保〕への道を開いたのである。この才能に富んだ若きドイツ商人ルーカス・レーム3世は、やがて仕事を成功させることで〔徐々に〕リスボンの商人世界でも、自分が注目されていることを自覚するようになった。例えば、ポルトガル国王さえもが彼に国王への〔アポなしの〕自由な謁見を許し、また彼の国王への助言ないし意見をポルトガル国王が採用して、〔ポルトガルの〕交易拡大に役立てたり、さらに極めて特別な〔国王からの〕寵愛（Huld u. Gnade）の印を彼に与えるなど、彼はポルトガル国王の大きな信頼をも勝ち得た。彼は、ほぼ7年間のリスボン滞在の任期を終えて国王に別れを告げるために、また我が身の振り方を、そしてヴェルザー商会支店を国王に一任するために、リスボン宮殿に赴いた。そして宮殿で、おそらく、彼以外のいかなる者も体験できないような、極めて名誉ある出来事が起こった。それは、①国王が自分の家族を彼に紹介したことであり、また②彼は国王の家族全員に、順番に彼らの手に〔お別れの〕キスをするという名誉が与えられたことである。そのため、彼はポルトガルとスペイン両国内を通過して帰国するという〔安全な〕長旅ができた。そして、彼はリヨン支店に再び勤務した。そのリヨンでの滞在は〔今回は〕短期的なものとなった。［S.XVI］

彼の心は今や、ネーデルラントに向けられていた。〔何故なら〕そうこ

うしているうちに、アントウェルペン〔アントワープ（Antwerpen）〕が国際商業の中心になったからである。そこで、彼は主人たるヴェルザー家に、リヨンからネーデルラントへの視察を要請した。ここでも、彼は彼なりの実践的な方法で、新しい取り引き先の開拓を――これは、彼の才能に期待が寄せられていたことの証でもあったのだが――、すなわち、当地アントウェルペンでヴェルザー商会（Compagnie）の取り引き先を僅か数年で新規開拓したのであった。しかし、彼は自分の上役たちの取り引き過程に破廉恥な行為を見出したと信じて、これに勇ましくも挑戦し、彼らとの争いに熱中したが、それも虚しく、敵は正にこの件で彼の罷免を求めた。しかもその罷免は彼の意に反して強行された。その後まもなく〔彼は〕アウクスブルクに家庭を営み、そして彼の兄弟たちと、さらに商業経験を十分に積んでいる２人のアウクスブルク出身者と共に、独立した商会（eigene Handelsgesellschaft）を設立するに至るのである。

独立したルーカス・レーム商会の成功は『日記』が雄弁に物語っている。何故なら、レームはこの成功の証明に同『日記』の中に、独自の、詳細な内容を含んだ「我が商会の主要な財産および収益そして若干の決算書など」という一章を設けていたからである。

この箇所は、明らかに、特に商人にとっては、『日記』の中で最も関心を抱く一章であろう。この章から、私たちは、次の諸点が理解できよう。すなわち、

①大規模な商事会社は、その当時、どのような営業を行っていたのか。

②当時の商契約はどのように締結していたのか。

③支店（倉庫）がどこに置かれていたのか。

④誰と、どのような商品を、そしていかなる国で、商取り引きをしていたのか。

⑤商取り引きでの利益はいかなるものであったのか。

この明確で、かつ誠実に叙述されている〔ルーカス・レーム商会の〕会計帳簿から、私たちは、20年間で、彼が最初に出資した設立資金（Stamm-

kapital—Hauptgut［基本財産: 原資］と呼ばれていたもの）を約 7 倍に増やした方法を理解できる。そしてこの場合でも、再び私はこのレームと言う人物の性格に係わる正直な〔尊敬すべき〕特質に注目しないわけにはいかない。私は彼が極めて誠実な人柄（Gewissenhaftigkeit）であったと考える。つまり、彼はいつでもその誠実な人柄から、いわゆる「申告租税」（geschworenen Steuer）――［この税率は100グルデンにつき1/2グルデン（0.5%）である］――の納税時期に、彼の財産を申告しており、これに関する証拠を『日記』の最後の「私の納税」という章で私たちに伝えている。［S.XVII］

この箇所でも、他の箇所同様に、このルーカス・レーム 3 世という人物はいかに徹底した現実主義者であり、またいかに正直な〔信頼できる〕性格の持ち主であったかという〔事実〕を伝えている。しかも、極めて特殊な体験の持ち主である！　読者が当然ながら期待するのは、ルーカス・レーム 3 世が『日記』の中でかなりの数の領主（主君）とその領主たちの諸国（邦）を知っている〔と記している〕程、頻繁に商旅した人物の 1 人であるので、――事実、例えば、彼は商取り引きで北アフリカ、アゾレス諸島、カナリア諸島、ヴェルデ岬諸島を訪問し、また長期にわたってポルトガルやネーデルラントに滞在していた――これらの地域で経験した豊富な体験に関する興味ある報告を読むことであろう。彼の望みは、彼が滞在した旅先のどこででも最上層でかつ最も教養の高い社交グループ（社会集団）に参加を果たしたような有能な商人が〔いて、その当人が〕彼を上流の人びとに紹介し、自分の知らない学ぶべき事柄をいろいろ教えてくれたら、ということであった。

しかし、この点に関する〔具体的な言及は〕『日記』の中では、ほとんど見つけることはできない。僅かに一箇所に現れるが、それも極めて短く、かつ二言か三言で済まされている。彼は決してむやみに筆を執りたがる人物でもなかったし、またむやみに読書好きな人物でもなかった。彼の『日記』は全体として――彼は『日記』の中で自分の非常に感動的な生涯を、また人生の営みを私たちに示していたのであるが――約50ページ弱の四つ

折り判の羊皮紙（Pergamentblätter in Quart）から成っている。しかも確固たる男性の筆跡で記され、そして感じ良く装丁された日記である。『日記』が短いのは、彼もあたかもドイツ商人の中で彼の従兄弟たるヴェルザー家やアントン・フッガー［1493–1560年］そして諸侯〔支配者〕と共に「沈黙は金なり」（Stillschweigen stehet wohl an !）という同じモットーを共有していたからであろう。

一般に同『日記』を読むと、読者は実際にしばしば、〔この『日記』の執筆者たるルーカス・レーム 3 世を〕無口で、そっけない、控え目な、そして無愛想な人物〔と思い込み〕、本気になって〔彼の〕悪口を言い始め、そして〔最後には〕〔彼とその原因をめぐって〕口論する気にさせられる程、彼はしばしば極めて冷静であり、〔普通の人びとが〕最も関心を引く事柄には目もくれず、彼の頭から離れない商売や営業戦略を優先するあまり、自分が家族や妻のために生きているということを考える時間を一寸たりとも持っていない〔エゴイストのような〕人物と感じることであろう。

しかし、実際は違うのではないだろうか。

たえず商旅にでること、終わりのない興奮と緊張感、身を焼き尽くすよ［S.XVIII］うな商売熱心、大規模な取り引きへの野心と責任などは、その当人に商売人生と直接関係のない事柄にも関心を払うことを求めるものである。そのために彼の性格は控え目になり、そして彼の表現方法も簡にして要を得た文体になったのかもしれない。彼の場合、すべて文体は短めに記載されている。〔例えば〕彼が最も緊張する商旅や商取り引きを終えた後、また重いそして苦しい病気になった場合に得られる休息〔休養〕さえ、短めに記載されている程である。彼は極めて、そしてただ単に商人的な性格の人物であった〔のかもしれない〕。この点をめぐっては、私たちは一般に自然の美しさ、芸術そして宗教などに関して明確な考えが彼には無かったなどと、断言することはできない。ただ、これらに対する彼の嗜好傾向はごく一時的にしか彼の心を捉えなかったのかもしれない。

もし同『日記』を正しく判断しようとするなら、このような視点をも理

解するように努めなければならない。おそらくは、その形式および内容から判断して、『日記』の執筆者の性格や人柄について極めて正確な表現が現れ、そして16世紀初期の完全なる一人の商人像が私たちに明確に述べられる時に、その視点は私たちに理解されるであろう。

つまり、同『日記』の第３の長所を挙げるとするならば、それは、『日記』がその当時の文化史＝民俗史〔生活史〕について、時々極めて注目に値し、また望ましい、さらにかなり詳細な解明〔の糸口〕を私たちに提供している点である。

歴史のこの分野〔文化史＝民俗（生活）史〕の研究者は、レーム３世の結婚式、彼の子供の出生および性格、彼の度重なる、しかも大規模な商旅そして湯治（Badekure）などについて取り扱っている〔第２、４、５、７、８の〕各章で、高く評価できる説明やまた部分的にではあるがまったく新しい説明を見つけるであろう。もちろん、この上に挙げた『日記』の各章も、全体として、一般的な興味をも提供している。

私の意図は、この２つの史料の内容について深く批評する論点を述べることにあるのではない。私のめざす点は、おそらく読者も気づいたことではあろうが、アウクスブルクの初期史およびその商業と関係のある問題点を強調することである。

［S.XIX］

しかしながら、私があたかも先入観や偏見に捉われて過大に賞賛していたかのような印象を与えないために、私はアウクスブルク市の名声と栄光について中立的な証言を伝える歴史なるものは一つも存在しないことに注意を喚起させるつもりでいる。そのようなものとしてのアウクスブルク市は、思うに、私が十分なる正当性をもって同市の名声として挙げなければならないと思った事柄をすべて自ら備えており、そして美しく輝いている衣装のようなものを身にまとってさえいた。そして、今日においても、同市は同様に美しい衣装をまとって自己を誇示しているのである。アウクスブルク市の全施設は――その道路、家屋、その完全なる水道システム、その防御施設と城壁そして都市を飾り立てる芸術や学問に関する多数の記念

碑、同市の教育や慈善のための立派な施設 〈そのために建設された多数の施設（Stiftung）などを含む〉などは――同市の偉大な過去をまさに雄弁に物語る明白な証拠であり、この点に注意をはらう人物に尊敬の念を抱かせ、また感嘆の声をあげさせ、そしてこのような人びとに、このアウクスブルク市は今日においても依然としてドイツ諸都市のうちで、真珠のようなすばらしい都市である、という告白を強いる程である。

それ故に、私は、アウクスブルク市の輝かしい歴史をいくらか知るようになるはるか以前に、少なくともこの都市が好きになっていたわけである。

もちろん、私同様に、注目すべき諸般の出合いを通して、同市に初めて入ると直ぐさま、立派な、そして忘れがたい印象を受け、そして〔その印象を〕永遠なものと受け取ってしまうような人はそう多くはいないであろう。私はこの点について幾分、詳細に説明しなければならない〔ようだ〕。

両親の家から〔外の〕世界への私の初めての遠出は、このアウクスブルク市の訪問であった。14歳の、まったく世情に疎い少年たる私は、両親の意向に従い、メミンゲン定期郵便馬車夫〔Memmingen Ordinari Boten〕の世話になりながら、アウクスブルク市まで旅行――その道中で、彼は私にちょっとしたビスケットをくれた――した。3日目の朝に――それは、すばらしい春の朝であったが――〔アウクスブルク市に到着した〕私は街の〔他の〕建物などには目もくれず、〔建築家エリアス・ホール［1573－1646年］の手による〕市庁舎（Hallhof）に直行した。

［S.XX］

〔そして〕そこで降りたが、私のお伴の者が東の方を指さし、私に次のような言葉が記されている小門を示した。そこには「さて、子供たちよ！

汝らはこの小門をくぐって入城すべし。そうすれば、汝はアウクスブルク市に到達すべし」と、記されていた。

私は試してみた。すると、魔法にでもかかったかのように、小さな州都たるアウクスブルク市に到着した子供たる私は、道幅も広く〔しかも〕堂々とした、すばらしいマキシミリアン通り（Maximilians-Strasse）の真ん中にたたずんでいた。

その瞬間に、またそのような光景を目の当たりにして、子供ながらに心で感じ取った気持ちを、私は、今なお、言葉では言い表すことはできない。しかも、それは、サー・ロバート・ピール（Sir Robert Peel）がこのすばらしい通りをペルラッハ塔（Perlachturm）の上から見た時に感激のあまり自然ともらしたとされる周知のアウクスブルク称賛の言葉よりも、さらに豊かで（voll）で感動的な気持ちであった。

私はその時に受けた畏敬と驚嘆ともいうべき感情を、それ以降、片時も忘れなかったし、またこの非常に美しい通りを散歩すると、過去の思い出が彷彿としてきて、今でもしばしば〔あの感情が〕私の心を捉えて離さない。

私が第二の故郷たるアウクスブルク市に心から抱く愛情は、あの感動から（davon）生まれたものであり、さらに私がその後神のすばらしいお導きにて〔幸いにも〕このアウクスブルク市で天職を得、かつ気高く信頼できる知友に恵まれた結果でもあった。また、この愛情のゆえに私は、アウクスブルク市の栄誉をますます高めかつ広げるべく、及ばずながら、全力を尽くしたいと思う次第である。

1861年１月　　アウクスブルク市にて

ベネデクト・グライフ（B. Greiff）
王室研究員、司書にして歴史協会の書記

## 第１章　私の両親の出生と結婚式そして〔それ以外の〕若干の情報〔ルーカス・レーム３世の家系図の紹介〕

**イエス・キリスト　聖母マリア**

［S.1］

（１）　曾祖父＝ハンス・レーム（1340〜1396年）

今は亡き曾祖父（Urahn herr）ハンス・レーム（Hans Rem）は1340年

2月2日に生まれた。そして私の曾祖母（Urahn frau）カタリーナ・バッハ（Catarina Bach）[1]は1350年の復活祭（3月21日以降）の8日後に生まれた。2人は1365年3月1日に結婚した〔新郎：25歳、新婦：14歳〕。

上記の私の曾祖父は1357年に彼が所有していた財産を売却して、全額で500グルデン（Gulden）〔の原資〕を手にした。その資金を元手に曾祖父は交易〔商品取り引き〕を始めた。ヴェネツィアへ初めて商旅した時、彼はそのヴェネツィアでの商品取り引きで100グルデンを失ったものの、残りの400グルデンを〔バルヘント織の原料の綿花〕に投資した。この投資で彼はヴェネツィアで莫大な利益を獲得し、そしてアウクスブルクに戻った。

〔このように〕曾祖父は〔商業活動のために〕ヴェネツィアとアウクスブルクを往復していた[2]。そして〔結果として〕神の恩恵によって、曾祖父は大きな幸運を手にした。つまり、曾祖父が〔商売を始めた〕最初の10年間は〔確かに追いはぎによる〕強盗や略奪に遭遇したり[3]、また不良借財などで損失を被ったが、しかし徐々にその苦境を切り抜ける〔ことに成功した〕ことを、私こと ルーカス・レーム3世は知った。

・・・・〔収益金額〕7,200 fl.（グルデン）

また曾祖父夫婦には8人の娘が授かった。そして娘一人ひとりに婚資〔持参金（Heirat Gut）〕として各、1,350グルデンを与えた。

・・・・〔合計で〕10,800 fl.

さらに曾祖父の死後、8人の娘たちに遺贈した〔金額は〕

・・・・7,350 fl.

また、娘の一人は〔アウクスブルク市の〕聖カタリーナ女子修道院（St. Katarina Frauenkloster）[4]に入った。その彼女に〔贈った金額は〕

・・・・400 fl.

なお曾祖父夫婦には4人の息子も授かった。息子一人ひとりに1,300 fl.を与えた。

・・・・〔合計で〕5,200 fl.

上記の曾祖父の〔財産〕目録〔に記載されている〕以外にも、曾祖父

は〔上記の〕12人の子供たちに立派な動産〔Forckong〕を与えた。さらに子供たち全員が妻たちと共に１年を通して曾祖父の家で、しかも曾祖父の金銭〔生活費〕で生活していた。

曾祖父が死亡したのは1396年〔享年56歳〕であった〔妻は46歳で寡婦になる〕。曾祖父に神のご加護がありますように。そして曾祖父が残した遺産は――〈そのかなりの金額は提示される予定であるが〉――上記の４人の息子たちに多くなくかつ少なくなく〔平等に〕遺贈した。その時に、神の恩恵と賜物（Gnaden u. Gaben Gots）をはっきりと理解することができよう。つまり、曾祖父は500グルデンを元手〔原資〕に、巨万の富（merglich gute）を獲得したのであった。曾祖父がどのような方法［S.2］

で、さらにはいかなる商品を取り扱って〔売買して〕いたかは、上記の〔財産〕目録の中には記載されていない。しかし、間接的かつ控え目には示すことができる。それは、私が今は亡き父親〔ルーカス・レーム２世〕から聞いた話によると、曾祖父は初めは綿花（die Bomwoll）[5]に投資し、そしてこの商品〔取り引き〕で巨万の富〔財産〕を残した、とのことであった。

（２） 祖父＝ルーカス・レーム１世（1392～?年）

今は亡き祖父ルーカス・レーム１世は、上記の曾祖父母を親として1392年10月18日（聖ルーカスの日：St. Lucastag）に誕生した。彼はウルム市出身のウルゼル・ベッセラー〔Ursel Bessererin zu Ulm（彼女は私の祖母にあたる）〕と結婚した。ただし、祖母がいつ生まれたのか、さらに祖父母たちがいつ結婚したのかを私は知らない。

祖父母には８人の娘と５人の息子が授かった。５人の息子たちは、マルクス（Marx）、ハンス（Hans）、マティウス（Mattheus）、ルーカス〔２世。彼は私の父親〕そしてギルク（Gilg）である。長男のマルクスは1429年三王礼拝日（１月６日）に誕生し、末っ子のギルクは1449年３月13日に誕生していた。また祖父の舅がハンス・ベッセラー[6]（Hans Besserer）であったことを、私は家系図から知った。祖父は裕福であり、

そして商業に従事していた。しかし、祖父の死後、彼の長男〔マルクス〕がほとんど〔の財産を〕蕩尽し、ほとんど〔の財産を〕賭け事で失ってしまった。兄弟たちは全員、莫大な損害を被った。息子たちは5人全員が、また娘たちは〔8人のうち〕5人だけが結婚した。

（3） 父＝ルーカス・レーム2世（1438〜1496年）

私の父ルーカス・レーム2世は、上記の祖父母を親として1438年の四旬節（Fastwuchen）の最初の金曜日の朝6〜7時の間に、ウルム市で誕生した。私の母マグダレーナは、ルーカス・ヴェルザー（Lucas Welser）を父親に、ウルズラ・ラウギンガー（Ursula Laugingerin）を母親に持ち、1457年の三王礼拝日（＝公顕節：1月6日）後の日曜日にアウクスブルク市で誕生した。

1478年11月20日（金曜日）に私の両親は婚約し[7]、そして〔同年の〕11月26日（木曜日）に結婚式を挙げた〔新郎：40歳、新婦：21歳〕。

1496年8月3日に、私の父親が死去した〔享年58歳〕。ただし、死に際に、教会で臨終の秘蹟（終油式）を授かった。神は私の父親に、また私達全員に永遠なる安らぎ（die ewig ruo[=ruhe]）を授けられた。

両親は5人の息子と2人の娘を残した。5人の息子とは、アンドリウス（Endris）、ルーカス〔3世（Lucas）：日記の執筆者〕、ハンス（Hans）、ギルク（Gilg）そしてジョルク（Jörg）であり、また2人の娘とはマドレーナ（Madlena）とカタリーナ〔（Kattarina）：彼女は父親よりも早く死亡〕である。また父親は私たちに〔遺産として〕①〔ウルム地方のライプハイム（Leipheim）市近くに位置する〕リートハイム（Riethaym）所領[8]〔に在る館（城）と村〕を――〈この財産は8,200グルデンで売却された〉――②同所領にある家屋、③ハンス・フェーリン（Hans Vöhlin）商事会社（Geselschaft）[9]に投資している4,500グルデン、④家具（Hausrat）、⑤銀製の食器、⑥宝石や高価な装飾品（装身具）などを残した。

またその後、私の母親は祖母から受け取った3,500グルデンと相続した現金1,250グルデンを私たち子供に残した。

（4） 私の舅＝ジョルク・エカイン（1469〜1507年）

今は亡き私の舅たるジョルク・エカイン（Jörg Echain）[10]は〔同名の〕ジョルク・エカインを父親に、クラーラ・レリンガー（Clara Relingerin）を母親に持ち、1469年７月11日に誕生した。〔彼らの〕子供は数人いた。

また今は亡き私の姑たるアンナ（Anna）はハンス・アンドルファー（Hans Endorfer）を父親に、バーベル・グレスラー（Barbel Greslerin）を母親に持ち、1476年２月２日に誕生した。

私の舅・姑は1497年11月22日〔新郎：28歳、新婦20歳〕に結婚した。

1507年２月12日に私の舅が死亡した〔享年37歳〕。それから２年後の［S.3］

1509年２月に姑が死亡した〔享年33歳〕。彼らに神の祝福があらんことを。彼らは３人の子供に恵まれ、その内、２人はクリストフ（Christoff）とジョルク（Jörg）と言う息子たちであり、もう１人はアンナ（Anna）と言う娘〔私の妻〕であった。さらに〔遺産として〕M／10[11]、すなわち１万グルデンと家屋そして現金など雑多なものを残した。

（５） 私＝ルーカス・レーム３世（1481～1540年）〔日記の執筆者〕

私ことルーカス・レーム３世（Lucas Rem）は1481年12月４日（金曜日の夜12時）に誕生した。私の妻アンナ・エカイン（Anna Echain）は1500年２月21日（金曜日の夕方の４～５時頃）に誕生した。そして私たちは1518年５月30日に挙式した〔新郎：36歳、新婦18歳〕。

この日は下弦の月（des Mon lest quartier）で、方位は南、魚座（Fisch）の18日である[12]。

〔注記〕 ここは同『日記』の執筆者の後代の子孫、すなわち孫によって記されるための空きページである。ルーカス・レーム３世の全生涯の記録は彼の子孫たちに、彼らが仕事に精励しかつ〔将来の〕展望を究め、それと並んで、容易に陥りやすい、だらしのない無益な行為〔例えば〕暴飲、暴食、遊興、華美に走らないよう己を戒め、したがってその誘惑から我が身を防ぎ、そして役に立つ事柄に自らの慰みを求めて、時を過ごすことができるように、役立つ事例として残したものである。

この家系図の紹介後に、〔実質的に〕日記そのものが始まる。

（第２章へ続く）

（注）

(1)　このカタリーナ・バァハは、夫ハンス・レームの死後アウクスブルク市近郊で大きな貢献を果していた。なぜなら、彼女は自分の名を冠した当地のゼールハオゼス（Seelhauses）修道院の創設者であるからである。――1410年の修道院創設文書より〔原注１〕。

(2)　すでにこの当時、アウクスブルク－ヴェネツィア間には定期交通が設けられていた。たとえば定期郵便配達夫たち（Ordinari-Postboten）が運営し、それに商人たちが旅の連れとして加わっていた。1555年に更新されたアウクスブルク市の郵便配達夫条例（Botenordnung）の中では、次のように定められている。すなわち、

「アウクスブルク市の郵便配達夫は毎土曜日の夕方に手紙を集め、寝ずに運び、そして運送時間に恵まれれば次週の土曜日にはその手紙をヴェネツィアで配達すべきである。同様に、ヴェネツィアでもアウクスブルク市出身の郵便配達夫が金曜日の夜に手紙を集め、そして運送時間に恵まれれば、次週の土曜日にその手紙をアウクスブルクで配達すべきである。

そして郵便配達夫が３月１日から聖ミカエル祭日（９月９日）の〔夏〕期間にアウクスブルク市に到着した場合、〔しかも〕その到着が金曜日の場合には、その者はその日の晩まで、あるいは到着が遅くて土曜日の場合には８時まで当地に留まる義務を負う。同様に、ヴェネツィアでは正午まで彼の地に留まる義務を負う。聖ミカエル祭日後から翌年の３月１日までの〔冬〕期間は、郵便配達夫は手紙をアウクスブルクでは午前中に配達すべきであるし、またヴェネツィアでも20時までに手紙を配達すべきである」。

この郵便配達夫たちは自ら、一つのツンフトないしはゲゼルシャフト（Zunft od. Gesellschaft）を構成し、市参事会の厳格な管理の下、市参事会から郵便配達夫のツンフト運営〔の承認〕と規約を手にした。私（B・グライフ）は別な機会に、上記の郵便配達夫規約をオリジナルな史料に基づいて報告してみたい、と思っている〔原注２〕。

(3)　アウクスブルク市の商人たちは、追いはぎ（Wegelagerer）による商品や財産の強奪や掠奪のため、しばしば大きな被害を受けていた。そのため、例えば、バイエルン大公シュテファン（Herzog Stephan von Bayern）は1388年にアウクスブルク司教ブルクハルト（Bischof Burkhart von Augsburg）の了解の許、フュッセン（Füssen）の地でアウクスブルク市出身の商人から、アルプス山脈越えの外国産ワイン百樽とヴェネツィアからの商品24梱（こり）を没収した。これに対して、商人たちは司教に対して彼の家と宮殿を打ち壊し、さらに司教座聖堂参事会会長（Dompropst）オット・フォン・ズントハイム（Ott von Suntheim）および首席司祭（Dechant）ウルリッヒ・ブルクグラーフ（Ulrich Burggraf）――（エマースホーヘン: Emershofen）――に対しても彼らの家を打ち壊すことで仕返しをした〔Mülichs Chronik. Msc.〕。

また、1408年のある年代記には、次のような記述がある。すなわち、

「諸都市の財貨が豊かになったので、この事に憤慨した貴族が、ヴェネツィアから来た商人たちから、彼らの財産をティロール地方のルーク峠（Pass Lueg）で没収した」〔原注３〕。

(4)　聖カタリーナ（Sanct Catharina）女子修道院はアウクスブルク市でも豊かな女子修道院である。同市の裕福な市民たち（die ersten Familien）の子女たちがこの女子修道院にはいった。ヴェルザー家出身のある女性が1518年、同修道院の院長であった。――同日記の第４章「私の婚姻締結、結婚式の支出、贈り物」の52ページを参照〔原注 4〕。

(5)　BomwollとはBaumwolle［綿花］のことである。したがって、アウクスブルク市での綿花工業（Baumwollindustrie）の開始を14世紀中期以前に設定することはできない。しかし、当地の亜麻工業（Linnenindustrie）ははるか以前から存在した。ただし、この亜麻工業は、綿花工業が長足の進歩を遂げた15～16世紀には、きわめて大きな打撃を被った。信頼できる史料によると、アウクスブルク市を名状しがたい不幸に巻き込み、そしてかつての名声を奪ったあの悲惨な30年戦争（1618～1648年）以前には、アウクスブルク市のバルヘント〔あや織

り綿布（Barchent）〕交易は繁栄していたので、6,000人もの親方〔手工業者〕たちがこの仕事で豊かに暮らしていた、とのこと。その後に締結されたウェストファリア平和条約以降、手工業者は辛うじて500人が残っていたものの、その後もさらに減少し続けた。またこの仕事に従事する者の半数はかつがつの生活（als Knappe）を、あるいは乞食を強いられた。

ある織工の家にあった会計簿から明らかなことは、1583年からとまたその以降の数十年では、1年が別に概算されていた。すなわち、〔1583年には〕35万のあらゆる種類のバルヘントが検査されていたが、1678年には逆に、僅かに3万2,000のバルヘントが検査されていただけであった（1678年の基本的な叙述は、神聖ローマ帝国の帝国都市アウクスブルクは著しい緩和／制限を必要としていた、とされている。Miscellanea Augustana. Msc.）。

しかし、亜麻工業に関して、シュワーベン地方、とくにアウクスブルク市では、亜麻布の漂白と仕上げ（光沢）の二つの作業部門では、きわめて早くに、長足の進歩を遂げていた。なぜなら、聖ガレン修道院の僧侶が908年にアウクスブルク市を訪れた折りに、アウクスブルク司教アーダルベロー（Bischof Adalbero von Augsburg）が彼らに贈った贈り物の中に、目の細かい（良質な）亜麻布からなる下着（Unterkleider: glizza, species lintei politi ac splendidi）が言及されていたからであった。卓布も同じ〔目の細かい、良質な亜麻布〕で出来ていた。その布で修道院の食堂の食卓を飾っていた。14〜15世紀には、目がより細かい亜麻布は依然として高価な物であり、〔目の細かい亜麻布製の〕美しいシャッツなどは君主に対しても品位のある立派な贈り物と見なされていた。カンマートゥーフ（Kammertuch）、すなわち、カムブライーカムリッヒの目の細かい亜麻布（Leinwand von Cambray-Camrich）から成るシャッツは刺繍で飾られており、1530年でさえ依然として国王の贈り物として振る舞われていた。

11〜13世紀にかけては、亜麻布は国際商業においてアウクスブルク市から持ち出される主な国際交易〔集散〕商品（Hauptstapelwaare）であった。南ドイツでは、亜麻布製造は主としてアウクスブルク市、ウルム市、ケンプテン市そしてボーデン湖畔の諸都市、とくにコンスタンツで繁栄した。ドイツ人はイタリアから、とくにヴェネツィアから生糸（Seide）と香辛料（Gewürze）を取り寄せ、そして逆にイタリア人にドイツ製の亜麻布を輸出していた。

アウクスブルク市の都市門閥たるハンス・フォン・ホイ（Hans von Hoy）は、――アウクスブルク年代記が語るところによると――1423年に破産した。それは、彼がヴェネツィアですべての綿花（Wullen）を買い占めようと試み、そして値上がりを画策しようとしたためであった。しかしながら、それらは〔すべて裏目にでて〕彼は経営不振に陥った。クレメンス・ゼンダー（Clemens Sender）は彼の年代記の中でこの破産を1455年の出来事と記し、この件について次のように報告している。すなわち、

「ハンス・フォン・ホイはこのアウクスブルク市で非常に裕福な商人であった。〔しかし〕彼は3万グルデン以上の借財を背負い込むことになった。その訳は、彼が他の商人が不利益になるように綿花を一般の買い入れ〔価格〕よりも高額で買い占めたためであった。そしてある日、ハンスは彼のすべての友人を客として招待して、彼らに自分の富をこれ見よがしに見せつけたのである。なぜなら彼は〔自分こそが〕アウクスブルク市で一番の長者だと思っていたからであった。〔しかし〕彼はスパイスとその他の商品を満載したまさにその船が沈没したことを知らなかった。彼に債権を持っている人びとや、彼の船が沈没したことを知った人びとが市参事会に押しかけ、そしてホイ家の全財産を、すなわち不動産と動産、現金、宝石類そして家具などを開示するよう要請した。このことは実行された。なぜなら彼は友人と食事をしている間、市の代官（Stadtvogt）が彼の家に乗り込み、そして彼と彼の妻の帯から鍵を奪い、そしてすべての財産を書き出した。そして彼は一時間たらずで、裕福で、有力者でかつ豪商の地位から転落して、貧しくそして破産者になってしまったのである。彼の財産は公然と市場に並べられ、そして競売に付された。彼の家具は約3,000グルデンで落札された」と（cf. Clem. Sender hdsch. Chronik.）。

綿布（Baumwollenzeuge）は早くはスペインで、しかもムーア人によって作られた。ムーア人は綿の木をこのスペインに移植させたのである。その活動の中心地はカタロニア地方、とくにバルセロナであった。しかし、まもなくイタリア人がこの商業部門を支配し、そしてギリシャ、小アジア半島、シリアから原料を手に入れた。アウクスブルク市の商人たちはバルヘント織布のために綿花をヴェネツィア人を介してキプロス島やクレタ島から入手していた（cf. Fischer Handelsgesch.）〔原注７〕。

(6) ベッセラー家（Die Besserer）は今日でもなおウルム市で栄えている都市貴族家門Adelsfamilie）である〔原注10〕。

(7) この当時、縁組み、すなわち、婚約（die Verlobung u. das Versprechen）と結婚式、教会内での結婚式とは区別されていた〔原注12〕。

(8) リートハイムの館と村落は、ウルム地方のライプハイム（Leipheim）市近くに位置する直属の騎士領（ein immediates Rittergut）であるが、1502年２月10日〔ルーカス・レーム３世：21歳〕に、ルーカス・レーム２世の未亡人たるマグダレーナ・ヴェルザーと彼女の２人の息子たち（アンドリゥースとルーカス３世）――まだ幼いハンス、ギルケそしてジョルクたちへの承認を取り付けて――によって、ウルム市へ、8,200グルデンで売却された。

同所領は『日記』の執筆者の父親たるルーカス・レーム２世が1492年にリートハイム所領の半分を、さらには1496年に残り半分を購入して手に入れたものであった。それよりはるか以前の1363年に、セバスチャン・レーム・フォン・テルヴィス（Sebastian Rem von Tervis）がカタリーナ・オーンゾルグ（Catharina Ohnsorgin）からアウクスブルク市近くの所領ペフェルゼー（das Gut Pfersee）を購入した。しかし、彼はすでに1370年に再びその所領をコンラート・イルズンク（Conrad Ilsung）へ売却していた。

同『日記』の執筆者の曾祖父たるハンス・レームとその妻カタリーナ・ベッキンは1386年にウルリッヒ・シュトレーリン（Ulrich Ströhlin）とその妻にして当時すでに寡婦たるオズワルト・バッヘン（Oswald Bachen）から市場町ツースマルスハウゼン（Markt Zusmarshausen）の半分に対する同夫婦の持ち分の三分の一を購入し、また1379年にはジョルク・グンペンベルク（Jörg Gumppenberg）からボックスベルク城（Schloss Bocksberg）を小さな市場町ラウグナ（Flecken Laugna）をも含めて購入し、さらに1385年にはアウクスブルク市民たるブルクハルト・ネッキンガー（Burkhart Neckinger）からヴェルタッハ橋の橋銭（〔関税〕Wertachbrucker-Zoll）を、そして1395年にはアウクスブルク市の司教ブルクハルト（Bischof Burkhart von Augsburg）からチロールのルルクス（Lurx in Tirol）の関税〔徴収権〕をレーンとして、隠居分90グルデンで購入した。

アウクスブルク市の市長（Burgermeister）の要職に就いていた同ハンス・レームは1387年に、市場町ツースマルスハウゼンの残りの持ち分を購入して、同町を完全に手中におさめた。騎士領リートハイムを入手することで、レーム家はシュワーベン同盟に参加し、そして帝国騎士団、聖ゲオルグ〔紋章〕隊に所属することになった。

ボックスベルク城と６ヵ村〔ラウグナ（Laugna）とロックデン（Rogden）、ミンデルスハウゼン（Mindelshausen）、ブルクヴァルデン（Burgwalden）、ヒンターブルク（Hinterburg）、そしてミッテルノイフナッハ（Mittelneufnach）〕は1524年にゲオルク・フォン・シュテッテン（Georg von Stetten）が購入した。彼はこれによりシュワーベン同盟に参加し、騎士団に採用された。（シュテッテン家はかなり早くから極めて有力な商人であった。ミヒャエル・フォン・シュテッテンはバウムガルトナー家（die Baumgartner）と商会を設け、チロール地方やイタリアで大きな取り引きをしていた。同商会はフッガー家と同様、最高額の税金800グルデンを納付していた。後に、同ミヒャエルは商会から退き、私人として余生を送った（Stetten Lebensbeschreibung S.190 ff.）。その後、これらの所領はシュテッテン家からセバスチャン・シェルトリン・フォン・ブルテンバッハ（Sebastian Schertlin von Burtenbach）が購入し、そして彼からフッガー家へ譲渡された（vgl. Sammlung verschiedener Urkunden, die

Augsburger Patriciatsfamilie der Remen betref fend. Manuscript der von Paris'schen Bibliothek.)〔原注14〕。

(9) フェーリン（Vöhlin)商事会社はアウクスブルク市とメミンゲン市に拠点を置く大きな商事会社である〔原注15〕。

(10) エカイン家は、エッケン家（Öchen）とエーゲン家（Egen）とも呼ばれ、有名なアウクスブルクの都市貴族〔門閥〕である。ペーター・エーゲンは1437年には遠隔地商人（mercator）と記録されていたが、1433年に皇帝ジーグムント（Kaiser Sigmund）がアウクスブルク市に滞在し、エカイン家に宿泊した時、このペーター・エーゲンの子供の洗礼に立ち会った（代父になった)。これは、彼が有力商人であったにちがいない証拠である。アウクスブルク市では皇帝がしばしば裕福な商人の家に宿泊した。たとえば、皇帝マキシミリアン１世は1500年に、ワイン市場――現在はマキシミリアン通り――にあるアドラー（Adler）の自宅に宿泊した。エーゲン家ないしはアルガウ家（Argaw）ないしアルゲン家（Argen）は金属、とくに鉛（Blei）を取り扱っていた商人であった。上記のペーター・エーゲンは1446年に、自分のみならず息子たちのためにもシャウムブルク司教ペーター（Bischof Peter von Schaumburg）から公共の計量器と貨幣の鋳造権と管理権を2,000グルデンで入手した（cf. Weng Chronikon sub anno 1446 und Hector Mülichs Chronik. Mscr.)〔原注17〕。

(11) M／10とは１万グルデンの金額である。しかも、それはグルデン金貨を意味する。それゆえ、しばしば『日記』ではグルデンが言及されているが、それらは常にグルデン金貨を意味する。それらの価値については、シュメラー（Schmeller）が自ら編纂した辞典の第二部、34ページに基本的な解説を加えている。それによると、１ケルン・マルクはグルデン金貨72枚に相当し、またハンガリー・ドゥカーテン金貨67枚に相当するとされている〔原注18〕。

(12) 中世時代の西洋占星術および黄道十二宮などについては、今後の課題とする。

〔付記〕

同邦訳にあたり、恩師の橡川一朗先生（東京都立大学名誉教授）からご教授をいただいた。また「クリオの会」（千葉県船橋市東部公民館で活動）は2000年４月から毎月１回、私に発表の場を提供し、かつ訳文のわかりにくい箇所を指摘して下さった。この場をかりて、お礼申し上げる。

なお「クリオの会」会員は五十音順に、入江絢子、恵志あや、折田利夫、鎌田壽夫・純子、川井喜美江、現田雅子、小境美代子、越川幸子、小滝洋子、実藤康子、杉田和子、鈴木圭子、辻和美、伴野恵美子、永井千鶴子、夏目智子、真野喜代子、宮崎正子、森苑子、矢口知子、山崎富実、山下宏、山田珠子、渡辺晴子の25名である（敬称略、2002年10月現在)。